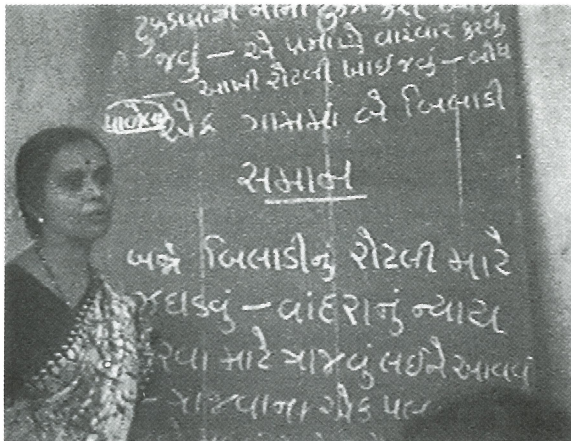


# AV JOURNAL

1991年12月 第 21 号



<インドの授業風景>

## 目 次

インド諸言語中央研究所の語学研修について  
 .....インド・パキスタン語学科 溝上 富夫..... 2  
 音楽と脳.....教育心理学 苅阪満里子..... 7  
 <LLミニ情報 No.1> 世界のテレビ放送方式について.....視聴覚資料係..... 9  
 <LL便り 1> 新規購入映像資料(レーザー・ディスク)所蔵一覧 その8.....10

# インド諸言語中央研究所の語学研修について

インド・パキスタン語学科 溝上 富夫

インド諸言語中央研究所 (Central Institute of Indian Languages、以 CIIL と記す) は、インド諸言語の研究と教育を目的として、1969年にカルナータカ州マイソール市に創立された、文部省直轄の機関である。同種の国立研究機関としては、ウッタール・プラデーシュ州のアーグラ市にヒンディー語中央研究所 (Central Institute of Hindi) が、アーンドラ・プラデーシュ州のハイデラバード市に英語及び外国語中央研究所 (Central Institute of English and Foreign Languages) がある。これら研究所の所在地はいずれも地域のバランスを考慮して、政治的に決められたものである。

インドの公用語は英語も含めて16あるが (図参照)、そのうち英語と、連邦公用語の地位を与えられてインド諸語の中で最有力言語であるヒンディー語と、古典語で現在はほとんど喋る人のいないサンスクリット語を除く13の公用語と、tribe (部族) と呼ばれる少数民族の言語が、CIIL の研究対象と

する言語である。少数民族の言語の記述研究では、とくに定評がある。

しかし、CIIL はまた、教育機関としても重要で、1966年に Educational Commission が決めたいわゆる「三言語方式 (Three-language Formula)」(㊟すべてのインド人に3つの言語を修得させようというもの。すなわち、初等・中等教育は地方語で行ない、州間のコミュニケーションの手段としてヒンディー語を必須とし、高等教育の手段ならびに国際間のコミュニケーションの手段として英語を教えることをといた。これが現在でも、インド政府の基本的な言語政策となっている。) に従って、1970年より、全国の中等学校の教師を対象に、上述の13の言語による語学研修を行なっている。多言語国家インドならではのこのプログラムの実態を、筆者がこの夏実際に研修生として部分的に参加した体験も踏まえながら報告しよう。



CIIL は語学研修を行なうセンターとして、全国に6つの支部 (Regional Language Centre) を設けて、それぞれが担当する言語の種類を次のように定めている。

南部地区支部 (Southern Regional Language Centre, マイソールの本部が兼ねる)

カンナダ語、タミル語、テルグ語、マラヤラム語

東部地区支部 (Eastern Regional Language Centre, 所在地はオリッサ州プバネーシュワル市)

アッサム語、ベンガル語、オリヤー語

西部地区支部 (Western Regional Language Centre, 所在地はマハラーシュトラ州プネー市)

グジャラーティー語、マラーティー語、シンディー語

北部地区支部 (Northern Regional Language Centre, 所在地はパンジャープ州パティアール市)

カシュミール語、パンジャープ語、ウルドゥー語

ウルドゥー教育研究センター (Urdu Teaching and Research Centre, 所在地はヒマーチャラ・プラデーシュ州ソーラン市と、ウツタル・プラデーシュ州ラクナウ市)

ウルドゥー語のみが3つのセンターで教えられるのは受講生が多いからである。名言語につき、大学の講師と同資格の教官が2名いて、指導にあたる(但しウルドゥー語は、ソーランに4名、ラクナウに3名いて、ベンガル語も4名講師がいる)。各センターには、大学の助教授と同待遇のセンター長 (Principal) がいて管理やマイソールの本部との連絡に当たる。教官は研究者でもあるが、語学教育に圧倒的に多くの精力を費やさなくてはならない。100パーセント研究職につこうと思えば、助教授に昇進してマイソール本部に勤務しなければならない。

各言語別の受講生の選抜・決定はすべて一元的にマイソールの本部でなされ、支部には決定権はない。研修期間は、毎年7月から翌年5月までの10ヶ月。募集要項は毎年1月に、全国の新聞約2500紙に掲載されるほか、各州政府の文部省を通じて、教育委員会、各中等学校長にも伝えられる。志願者の年齢制限は原則として35才まで(志願者の少ない言語では40才まで認められる)。4月に願書を締め切り、マ

イソール本部の選考委員会で受講生とその研修語学の種類を決める。出願者は願書に希望の語学を第3希望まで書くことができる(もちろん、自分の母語を除く)。私の調べたところでは、特定の言語に対する、受講者の志願の動機はかならずしも明確なものではなく、ボンベイが見たいから西部支部で教えられる言葉を選んだ、という者もいた。(㊦私はCIILと東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所との協定に基づき、文部省科学研究費による共同研究員としてシンディー語研究のため、この夏約2ヶ月間、プネーに滞在した。)

1970年から1983年までの14年間にこの研修を終えた者の言語別総数は次の通りである。参考までに、1981年のインド国勢調査における、家庭での使用者の総数を( )内に挙げることにする。アッサム州のみは政情不安のため、この年は国勢調査が行なわれなかったため、1971年のを挙げる。

|            |                  |
|------------|------------------|
| ①ウルドゥー語    | 802 (35,323,282) |
| ②ベンガル語     | 542 (51,503,085) |
| ③アッサム語     | 367 (8,958,977)  |
| ④タミル語      | 338 (44,730,389) |
| ⑤テルグ語      | 314 (54,226,227) |
| ⑥グジャラーティー語 | 272 (33,189,039) |
| ⑦カンナダ語     | 266 (26,887,837) |
| ⑧カシュミール語   | 214 (3,174,684)  |
| ⑨マラーティー語   | 213 (49,624,847) |
| ⑩マラヤラム語    | 196 (25,952,966) |
| ⑪オリヤー語     | 194 (22,881,053) |
| ⑫パンジャープ語   | 129 (18,588,400) |
| ⑬シンディー語    | 91 (1,946,278)   |

(㊦シンディー語の使用者数は264,189,057)

実際の使用者の比率をかならずしも反映したものでないことが分かる。出身州別の統計もある。詳しくは紙面の都合で割愛するが、州によって受講者数に大きな偏りがある。比較的熱心な州とそうでない州があるということである。多い州のベスト5を挙げると次のようになる。(数字は受講生の総数)

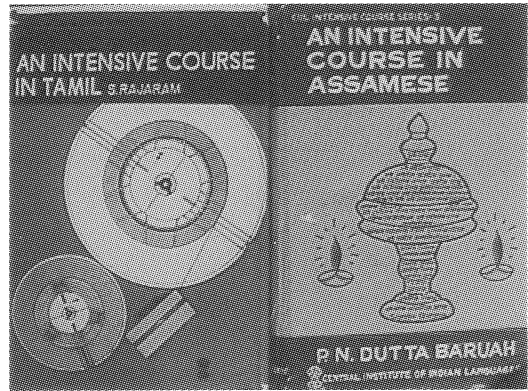
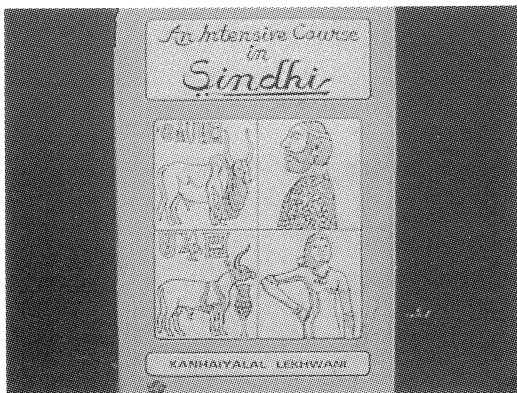
|                 |     |
|-----------------|-----|
| ①オリッサ州          | 905 |
| ②アーンドラ・プラデーシュ州  | 438 |
| ③ヒマーチャラ・プラデーシュ州 | 394 |
| ④アッサム州          | 322 |
| ⑤カルナータカ州        | 305 |

メーガーラヤ州は人口は少ないとはいえ、わずか

1名である。

また、受講生は総じて、隣接の自分の言葉と近い関係にある言語を選ぶ傾向にあることが分かる。たとえば、アーンドラ・プラデーシュ州（テルグ語地域）出身者はカンナダ語やタミル語を選び、オリッサ州（オリヤー語地域）出身者はベンガル語を、マハラシュトラ州（マラーティー語地域）出身者はグジャラーティー語を選ぶという風に。（㊟地区に示した、南インドの4つの言語はドラヴィダ語族に属し、それ以外の言語はインド・ヨーロッパ語族のインド・アーリアン（カシュミール語はダルド語派）語派に属する。この2つの語族の間には借用語を除くと、あまり共通性はないが、同じ語族の間なら、例えばラテン語派におけるスペイン語、イタリア語、フランス語、ルーマニア語、ポルトガル語に似た関係にあり、相互の理解と学習は容易である。“National Integration”（国民統合）という、このプログラムの目的からすれば、むしろ北インドの人が南インドの言葉を、逆に南インドの人が北インドの言葉を学ぶ方が好ましいにちがいないが、冒険を避けてイージーな道を選ぶとするのは、どこでも変わらぬ人情なのかもしれない。ただ、ハリヤーナー州出身者73名の全員が南インドのテルグ語を選んだのはきわめて不自然であり、調べてみると、同州において第2言語に、隣接のパンジャブ語（シク教徒たちの母語）を採用させないためテルグ語を採用したという、きわめて政治的な理由が明かされた。

最近の受講者数の統計が得られないのは残念だが、関係者の話では、大体ほぼ毎年500名ほどの受講者があり、ウルドゥー語とベンガル語が人気語学であることは変わらないという。



採用された受講生は、もちろん10ヶ月の有給休暇をそれぞれの学校からもらって、各センターにやってくるのだが、往復2等列車による旅費が支給されるほか、授業料の一部も負担される。さらに、研修旅行の費用も食費を除いて負担される。しかし、宿舍としてあてがわれる学生寮の設備は貧弱で、2～3人の相部屋で食事も悪い。これは後述のように、学習意欲の減退にもつながっている。10ヶ月の研修を終えて試験に受かると（60点が合格点）、修了証明書をもって、勤務校にもどって、その言語を教えることができる。その場合は、特別手当として、月100ルピー（約500円）が支給される。低過ぎる額ではあるが、インドの中等学校の教師の給料は、大体2,000～2,500ルピー程度であり、日本の国立大学の教官の大学院（修士課程）手当が本給の3パーセントであることを思うと、その程度なのかと納得もいく。

さて、研修の内容についての説明にうつろう。10ヶ月を14週間の初級（Basic Course）、13週間の中級（Intermediate Course）、13週間の上級（Advanced Course）に分け、初級では基礎文法の修得と会話に重点がおかれ、中級では文化の理解に重点がおかれ、上級では文学書を読むことになっている。

初級用のテキストは、各言語共 *Intensive Course in*……という、マイソールで編纂したテキストを使用している。これは、日常会話を中心とする文例からなる共通のモデルを基本として、個別言語毎にその特徴を加味して書かれたものである。*Intensive Course in Sindhi* の例でいえば、12の単元（Unit）と72課から成る、882ページという分厚い本であるが、基本文例だけならさほどではなく、大部分はドリルと練習問題に割かれている。しかし、分量がた

っぷりあるので、これをこなすには相当な時間と忍耐を要する。この本は複雑な文法体系をもつシンディー語文法が会話を通して自然に、しかも易から難へと体系的に学べるようになっていて、非常によくできている。各課の終にある文法ノート、巻末の語彙リストも大いに役立つ。インドの本の常で、誤植が多いのが欠点だが、デーヴァ・ナーガリー文字とシンディー文字（ペルシャ文字に改良を加えた52文

字から成る）の両方で印刷されていて、実に重宝である。本家のパキスタンでも、シンディー語を第2言語として学ぶ人のために、これほど親切に書かれた信頼すべき本は出版されていない（㊤パキスタンのシンド州ではシンディー語が唯一の公用語である）。かなりの程度まで、本書で独学が可能である。ほぼ一課を一日の割合で進む。初級の時間割は次の通りである。

| Period | Time        | Monday & Tuesday     | Wednesday & Thursday                  | Friday               |
|--------|-------------|----------------------|---------------------------------------|----------------------|
| I.     | 10:50~11:55 | Pattern Introduction | Pattern Introduction                  | Pattern Introduction |
| II.    | 11:55~13:00 | Pattern Drills       | Pattern Drills                        | Pattern Drills       |
|        | 13:00~13:30 | Tea Break            | Tea Break                             | Tea Break            |
| III.   | 13:30~14:20 | Conversation         | Conversation                          | Script Reading       |
| IV.    | 14:20~15:10 | Pattern Exercise     | Picture Narration<br>Guided Narration | Revision             |
| V.     | 15:10~16:00 | Language Laboratory  | Language Laboratory                   | Weekly Test          |
| VI.    | 16:00~16:50 | Script Reading       | Script Reading<br>Script Dictation    |                      |

しかし、これは建前で、シンディー語の教官が1人空席になっていて、1人で担当という事情もあり、実際は、午前中90分、午後90分計3時間ぐらいしかやっていない。L.L.も使っていない。大体、午前中は教科書中心の授業、午後はオーラル練習が中心だった。グジャラーティー語やマラーティー語はほぼ5時間の授業をやっていたが、シンディー語の教官にいわせると、受講生の忍耐力は1日3時間が限度で、それ以上はいくらやっても能率が上がらないという。しかし、彼らはこの期間、語学ばかりをやればいいのであり、しかもさほどの予習・復習を求められていないという事情のもとでは、1日3時間というのは、いかにも少なすぎると私には思えた。もっとも、そのおかげで、私は研究時間の余暇を割いて、滞在中の全期間、インド人の受講生といっしょに机を並べてこの研修に参加することができたのであるが。また、1日3時間しか座れないことに同情すべき理由もある。それは、およそ快適とは逆の汚い狭い教室で、古い学生食堂に仕切りをもうけただけのものであり、屋根は大雨の影響で落下寸前で、受講生や教官の頭上にいつ瓦が落ちてきてもおかしくないという状態（しかも、修理しようという気運はまるでなし）、野良犬は入ってくるわで、監獄の

方がまだまし、といった雰囲気では、私も3時間以上座る気はしなかった。しかし、この3時間から解放されると、彼らの大半はそれ以上ほとんど勉強しない。いやしくも、全国中等学校の教師が集まって来ているからには、熱っぽく教育談議にでも花を咲かせているかと思いきや、そうでもなく、俗っぽい世間話をやっているだけである。教育の荒廃が叫ばれて久しいとはいえ、まだまだ日本の学校の教師の方がずっと質は高いと思った。

ところで、シンディー語の受講者数は19名で、全員男性、平均年齢は30才。母語別分類では、シンディー語11名、アッサム語3名、ベンガル語3名、オリヤー語1名、マラーティー語1名だった。彼らのシンディー語の学力を本学のシンディー語の学生の語学力とを単純に比較するには無理があるが、仮に本学の学生がこの研修に参加したと仮定する。インド人の最優秀生をA、平均的受講生をB、最劣等生をC、外大の最優秀生をa、平均的學生をb、最劣等生をcとすると、次のように予測することは可能であろう。

勤勉度において、  $a > b > A > c > B > C$   
 読解力において、  $A > a > B > b > C > c$   
 聴く力と発音は、  $A > B > a > C > b > c$

という順序となろう。もちろん、IQと一般教養度は、 $b > B$ である。私自身、筆記試験では、彼らの誰にも敗けなかったが、たとえば、シンディー語の映画を観て理解する能力では、完全に彼らに脱帽であった。恐らく、インド人の「血」の中に、学習しなくても、文字言語に頼らなくても、話し言葉を聞いただけでかなりの程度理解できる能力が備わっているのであろう。それを文化というのであろう。

彼らの学力差も著しい。毎週テストがあるが、50点満点で、20点から48点ぐらいまでの分布がある。総じて、地理的にシンド地方（パキスタン）から遠ざかるほどシンディー語を難しく感じており、アッサム人、ベンガル人、オリッサ人とも、彼らの母語には、文法的性も、能格表現もない。動詞の変化もシンディー語に比べるとはるかに簡単であり、発音も [s] が [ʃ]、[e] が [ɔ] となるので、困難さはひとしおである。授業そのものが、はじめのうちはシンディー語で行なうので、シンディー語そのものが余りできない彼らには二重苦である。シンディー語地域出身者は、言語の親近性のため、他の母語集団より有利で、さすがに試験の成績も比較的よかった。しかし、類似性ゆえにかえって混乱を起こすことがあり（たとえば、 $-a\#$  はシンディーでは男性単数のマーカーだが、シンディーでは男性複数マーカーである）、シンディー語と同じ構造をもつシンディー語の能格表現の理解にてこずっていたのは、全く不思議であった。シンディー語は難しくないという、地元プネー出身者（母語はマラーティー語）は、母音の長短の表記をつねに間違っていた。総じていえることは、我々日本人は外国語を文法で覚えるのに対して、インド人は異言語（外国語とはいえないのでこういおう）を体で覚えようとする、という違いがある。いずれも一長一短であるが。

発音に関して、受講生全員に難しく感じられたのは、シンディー語特有の Implosive（入破音）である。これは、いきなり教えるのは無理とのことで、初級では、無視していた。また、シンディー文字も余りに覚えが悪いので、後回しにするとのことであった。

シンディー語の教官の受講生に対する態度は、子供に接するような、ときにはバカにしたところがあった。日本では考えられないことである（いやしく

も、高校教師を集めて、大学教官が講義する場面を想像してみよ）。しかし、余りにも理解力の悪い受講生を前にしては、思わず失礼な言葉を吐いてしまう心情は私も語学教師だからよく分かる。受講生の中には、全く語学に向いていない者がいる。日頃、黒板を背にして生徒を教える立場にある者が、急に生徒にもどった戸惑いを隠せない者もいる。インドでは、日本の学校のように、教師の研修といったことが日常化されていないのだ。また、平均年齢30才といえ、すでに既婚者で、故郷に妻子を残しての「単身赴任」である。そこから来る精神的緊張は相当なものらしく、そのために勉強が手につかない者も多いとか。私には、30才の教育者にしては精神的な未熟さと映る。しかし、インド研究者としては、やはり次の点を斟酌しなければならない。つまり、インドは日本と全く異なり、heterogeneousな社会であり、出身地の州を去って他州へ行くというのは、地方の田舎からはじめて東京へ出て来るのとは全くレベルの違う「カルチャー・ショック」を伴うということである。まさに、「異国」なのである。インド全国におそらく何十万といる中等学校教師のうち、このプログラムにわずか500名ほどの応募者しかないのはなぜか、という疑問に対する答えのひとつは、このことで説明がつくと思う。

授業中、受講生のあまりの不出来を嘆いていた教官も、しかし長期的には楽観主義者である。中級コースの終から上級コースの間に設けられた2週間の研修旅行（各言語の話されている地域を実際に訪れて住民との交流を通じて、言葉の実践力を養う）はこの研修の目玉だという。そして、10ヶ月の研修が終る頃には、7、8割の受講生がシンディー語が話せるようになり、なかにはシンディー文学を自分の母語に翻訳する者も出るという。これこそ、インド政府の目指す成果だろう。私は、来年、私の「クラス・メート」達がシンディー語にどれだけ上達しているかを見るのを楽しみにしている。

そして、50才の身で、20才の学生諸君と同じように語学の基礎訓練を受けるという経験をして来た私の心境は、嫁を経た姑にも似たものがある。シンディー語実習の授業では、従来にも増して諸君に秋霜烈日のごとく迫るであろう。

# 音楽と脳

教育心理学 芋 阪 満里子

BGM (バックグラウンドミュージック) を聴いてほっとしたことは、誰でも一度は経験したことがあるだろう。最近、デパートの中やホテルのロビー等だけでなく、病院の待ち合室や検査室でもBGMが流されている。聴き覚えのあるメロディがふと脳裏をよぎり、待ち時間を忘れさせてくれることもあるだろう。しかし、駅のプラットフォームでバッハ教会音楽を聴かされた時などは、非常にがっかりすることもあるし、年末のスーパーなどで、かなりの音量で同じ音楽を繰り返しているのにはいささか閉口する。

このところ、生活の中に音楽を積極的に取り入れようとする傾向があり、クラシック音楽を幾つか選択して、たとえば、仕事のクラシック、眠りのクラシック、元気の出るクラシックなどとして一つのCDの中に収められていたりする。筆者自身もその中の幾つかを試みているが、仕事のクラシックに聴きいって仕事にならなかったり、眠りのクラシックに好きな曲が収められていて覚醒水準が上がってしまったということもあり、無論個人的な差異はあるにしろ、収録されている曲のすべてが目的に合うとは限らないようである。また、収録されている音楽は、ほとんどが曲の中のある一楽章のみから編制されているため、あまり続けて聴いていると、関係の無い曲の一つの楽章ごとがまとまりを持って体制化される。例えば一つの楽章を聴き終えると、次の別の曲が予期されると言う具合である。

さて一般的には、眠りのクラシックには速いテンポの曲が多いようである。ゆったりとした曲を聴くとゆったりするのは当然のようだが、これには生理学的な基礎変化が起こっているのである。筆者が行なった実験では、音楽を聴きながら脳波の測定をしてみると、音楽が微妙に脳波のリズムに影響しているのがわかった。そこで、音楽による脳波の変化について述べてみたい。

成人の脳波では、安静にしている時に最もよく出現しているのはアルファ波と呼ばれる周期が約100

ミリ秒の波である。従って、安静時の脳波を周波数分析してみると、約10HZの位置に、非常に顕著なパワースペクトルのピークが出現する。アルファ波は、視覚刺激等により強く影響を受けるため、何かを見ようとしたり、明かるい光が照射されたりすると、また、複雑な計算問題を解こうとすると、このピークはとたんに不明瞭となる。従来は、脳波計で紙に記録された脳波の波形を、主に視察により判別していたのであるが、その場合には、こうしたアルファ波の変動は、あたかもアルファ波が無くなっているようであると見なされていた。そこで、このような変化は、アルファ波ブロッキングという名称で呼ばれていた。しかし、脳波に周波数分析等が頻繁に行なわれるようになり、その周波数成分の構造が明瞭になってきたため、アルファ波は無くなってしまわずに減少しているという事がわかったため、アルファ波の減衰 (attenuation) という表現が適切であるとされてきた。このような周波数分析の結果から、思考中にもアルファ波はブロックされるのではなくアルファ波の成分が減少することがわかった。

さて、音楽を聴いている時にも、アルファ波は依然として残っている。この場合には、減衰するどころか逆に増強する場合もあることが確認されている。勿論、適切な音量で聴かされた場合である。聴く人にとって、適度の音量で、しかも心地良いと感じられるような音楽では、アルファ波のパワースペクトルのピークは一層高くなって、アルファ波が増強していることがわかる。

一方、アルファ波のピークは、音楽のテンポにより変化することもある。ゆったりとしたアンダンテ等の曲を聴いている時には、音楽を聴いていない場合よりもピークの位置が低周波数の側に出現することがある。また、軽快なアレグレット等の曲を聴いている時などには、ピークがより高い周波数の帯域に出現している。このようなピーク周波数のシフト

は、アルファ波の周波数成分に変化が起こっている事を示唆している。即ち、ゆったりとしたテンポの遅い曲では、アルファ波のリズムが若干遅くなっていることを、また、テンポの速い曲ではアルファ波のリズムが速くなる傾向があることが推察されるのである。それぞれの音楽を聴いた人に、曲を聴いて感じられる印象の評定をしてもらったところ、テンポの遅い曲ではゆったりとして安静であるとする評定値が目立ち、テンポの速い曲では生き生きとして元気がでるとする評定値が極めて高いものであった。そのような曲から受ける感じが、脳波という生理学的な変化とも対応していることは興味深いものである。

本来、アルファ波は増強させたり減少させたりといったふうに自分自身でコントロールして変化させることができないものである。しかし、少し工夫することにより、誰でもアルファ波をかなり持続的に出現できるようになる。このような手続をバイオフィードバックと言う。これは、脳波等の生体の変化を、その人にフィードバックすることにより、自ら生理学的変化の傾向をより一層高めることができることを言う。

アルファ波のバイオフィードバックについて言えば、ある人の脳波を測定しながら、その人に出来るだけリラックスするようにしてもらおう。そして、脳波のアルファ波出現がある水準まで達すると、そのことが音や光を用いてその人に知らされる。この場合の音や光は、出来るだけ快い印象が感じられるものが望ましい。例えて言えば、アルファ波が出現すると鈴虫の鳴き声が流れてくると言った類のものである。そうすると、脳波を測定されている人は、なんらかのやり方で、できるだけ鈴虫の声が長く持続

できるように努力するのである。勿論、この場合のやり方、工夫の仕方は人により異なる。ある人は呼吸をゆっくりするように注意したとか、脈拍を心の中で数えてみたとか、故郷の田園風景を思い浮かべてみたり、また、昨夜のテレビで見たアニメを思い出していたという調子である。そのようななんらかの努力により、アルファ波が自分でコントロールできることに気付くと、自分自身で自己の心身を安静化させることが感じられるのである。当然のことながら、絶えず脳波の測定をしながら仕事をしたり生活したりすることはできない。しかし、一度、自分自身で脳波のアルファ波をコントロールできることを体験すると、脳波の測定をしていなくとも、また鈴虫の声にフィードバックされなくとも、先に体験したやり方で自己を安静化できるという自信が得られるのである。そして、こうした経験により、ストレスに置かれた場合にも比較的安定的な心身状態を保てるものと考えられる。なお、禅の修業僧の脳波には、かなり持続的にアルファ波の出現がみられ、開眼や刺激による変化も少ないという報告もある。

さて、このようなバイオフィードバックを念頭に置いて、自分自身で心身の安静化に努めることもできよう。例えば、好きな音楽を聴いてみるのもよいだろう。ゆったりとしたテンポの遅い曲を聴いて、アルファ波のリズムもゆったりとさせてみる。また、時には、快活なリズムのテンポの速い曲を聴いて、アルファ波のリズムを活性化をさせるなどというようにすることも出来得るかもしれない。いずれにせよ、音楽を積極的に生活の中に取り入れることは、心身の健康によいものと期待されるのである。



〈映像信号変換システム〉



## 世界のテレビ放送方式について

視聴覚資料係

海外でビデオテープを購入して、現地では見る事ができたのに日本に帰って来てビデオデッキで再生してみると、映像は出ずに、早送りの音声のみが聞こえてきたという話を最近よく耳にします。これは、各国々でテレビ放送（ビデオテープ）方式が異なるからです（表①参照）。海外のテレビ放送方式で録画されたビデオテープは、その国と同じテレビ放送方式のビデオデッキとテレビがなければ視聴することは出来ません。

世界のテレビ放送方式は、大きく分類して①NTSC、②PAL、③SECAMの3方式に、より細かく分類して3.58-NTSC、4.43-NTSC、PAL、M-PAL、N-PAL、SECAM、MESECAMの7方式になります。

①NTSC方式は、日本のテレビ放送方式で、定格は水平走査線数が525本で、1：2も飛びこし走査で30フレーム60フィールド、フィールド周波数が60Hzです。

表① 各国のビデオ放送方式一覧

| 方式       | 国名  |
|----------|---|
| NTSC     | 日本、韓国、フィリピン、ミャンマー、台湾、アメリカ、エクアドル、エルサルバドル、カナダ、キューバ、グアテマラ、コスタリカ、コロンビア、スリナム、ニカラグア、チリ、トリニダッドトバゴ、ドミニカ共和国、ハイチ、パナマ、バージン、バハマ、バミューダ、バルパドス、プエルトリコ、ベネズエラ、ペルー、メキシコ、グアム、他   |
| PAL      | アフガニスタン、アラブ首長国連邦、イエメン、イスラエル、インド、インドネシア、オーマン、カタール、北朝鮮、クウェート、サウジアラビア、シリア、シンガポール、スリランカ、タイ、中国、トルコ、ネパール、パキスタン、バーレン、香港、マレーシア、ヨルダン、オーストラリア、ニュージーランド、アルジェリア、ウガンダ、カナリア、ザンビア、スーダン、タンザニア、ナイジェリア、南アフリカ共和国、リベリア、アイルランド、イギリス、イタリア、オーストリア、オランダ、スイス、スウェーデン、スペイン、デンマーク、西ドイツ、ノルウェー、フィンランド、ベルギー、ユーゴスラビア、ルクセンブルグ、アルゼンチン、ウルグアイ、他 |
| M-PAL    | ブラジル  |
| ME-SECAM | イラク、イラン、サウジアラビア、レバノン、ベトナム、エジプト、ガボン、ザイール、チュニジア、モロッコ、リビア、ギリシャ、ソビエト、チェコスロバキア、ハンガリー、モナコ、東ドイツ、ブルガリア、ポーランド、ルーマニア、タヒチ、ニューカレドニア、他   |
| ECAM     | フランス、他  |

②PAL方式は、西ドイツで開発されたもので、Phase Alternation by Lineの略で、水平走査線数が625本で25フレーム50フィールド、フィールド周波数が50 Hzです。

③SECAM方式は、フランス国営放送が開発したもので Sequential a memoireの略で、水平走査線、フレーム、フィールドはPAL方式と同じ定格です。

さて、上記のようなNTSC方式以外のビデオテープを授業でプレゼンテーションするにはどのようにすればよいですか。

一つは、ビデオテープの信号を日本のNTSC方式に変換する方法です。LL係では、AVジャーナル第18号で紹介しました視聴覚教材作成サポート・システムの一つとして、著作権の範囲内で映像（ビデオ信号）変換サービス（但し、NTSC→PAL/SECAMのみ）を実施しています。このシステムは、ソース側機器としてVHS、Be、Umaticの多方式ビデオデッキを準備し、TV標準方式変換装置（LT-1250 TSC / SSECAM DECODER (OKI)）を介してレコード側のNTSC方式のVHSビデオデッキに録画するものです。但し、この変

換器は、精度が良すぎて、ソースになるビデオテープの信号が弱かったり、不安定であればそのまま変換するのでフレームずれを起こしたり、カラーが白黒になったりすることがあるので注意する必要があります。

もう一つは、方式変換ビデオ（AG-W1 (Panasonic)）を使用する方法です。このビデオデッキは、世界のテレビ放送方式全てに対応し、NTSC方式に変換し出力するので、多方式のモニターテレビを必要とせず、NTSC方式のテレビでNTSC方式以外のビデオテープを見ることができます。この機器は、映像信号を方式変換回路で一度デジタル化し再度アナログ信号に戻す方法とっているので不安定な信号もフレームずれせずに変換します。

現在のところ、LL係では、方式変換ビデオを3Fビデオルームに1台常設、4、5階LL教室の移動用として1台ありますが、今年度末にリプレイスされる4-I、II LL教室には設置する予定です。また、教務課では、この方式変換ビデオ（移動式）を貸出用としてB棟1階の教務課分室に4台準備していますので、一般教室でビデオ教材を使用する際にはご利用下さい。

## 〈LL便り1〉

# 新規購入映像資料（レーザー・ディスク）所蔵一覧

その8

(1991年11月現在)

| 資 料 名  | 音 声     | 所要時間  | 資料番号     |
|--|---------|-------|----------|
| 霊幻道士3  | (中 国 語) | 1'32" | C-0058 B |
| プロテクター   | 〃       | 1'36" | C-0118   |
| 皇帝密使   | 〃       | 1'36" | C-0119   |
| 七福星  | 〃       | 1'34" | C-0120   |
| 霊幻追鬼   | 〃       | 1'30" | C-0121   |
| ツーフインガー鷹   | 〃       | 1'37" | C-0122   |
| 北京オペラブルース  | 〃       | 1'46" | C-0123   |
| チャンピオン鷹  | 〃       | 1'44" | C-0124   |
| The never ending story II (ネバー・エンディング・ストーリー第2章) (英 | 語)      | 1'30" | E-0146 B |
| Back to the future II (バック・トゥ・ザ・フューチャー2)           | 〃       | 1'48" | E-0337 B |
| Back to the future III (バック・トゥ・ザ・フューチャー3)          | 〃       | 1'59" | E-0337 C |
| Die hard II (ダイ・ハード2)                              | 〃       | 2'12" | E-0402 B |

| 資料名  | 音声   | 所用時間  | 資料番号   |
|--|------|-------|--------|
| Batman (バット・マン)                                      | (英語) | 2'07" | E-0468 |
| Anne of green gables (赤毛のアン)                         | //   | 2'21" | E-0470 |
| Dead poets society (いまを生きる)                          | //   | 2'09" | E-0472 |
| Born on the fourth of July (7月4日に生まれて)               | //   | 2'24" | E-0473 |
| Andrew Wyeth: Helga (アンドリュー・ワイエス画集 ヘルガ) (多重(日本語・英語)) |      | 0'36" | E-0503 |
| Degas (ドガ―安息なき精神―)<br>(アート・フィルム・ギャラリー2)              | //   | 1'00" | E-0504 |
| Vermeer (フェルメール―謎を秘めた女性達―)<br>(アート・フィルム・ギャラリー6)      | //   | 0'45" | E-0505 |
| Raphael (ラファエロ) (アート・フィルム・ギャラリー10)                   |      |       |        |
| The dead (ザ・デッド―「ダブリン市民」より―)                         | (英語) | 1'23" | E-0507 |
| My left foot (マイ・レフト・フット)                            | //   | 1'33" | E-0508 |
| Twin peaks (ツイン・ピークス)                                | //   | 1'54" | E-0509 |
| Death in Venice (ベニスに死す)                             | //   | 2'10" | E-0510 |

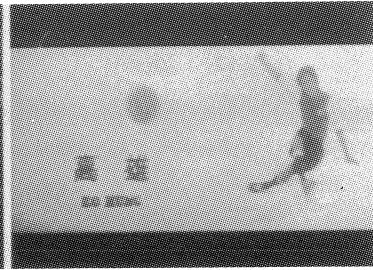
〈ビデオ・プリンターによりレーザー・ディスクの画面コピー〉



〈ツーフィンガー鷹より〉



〈北京オペラブルースより〉



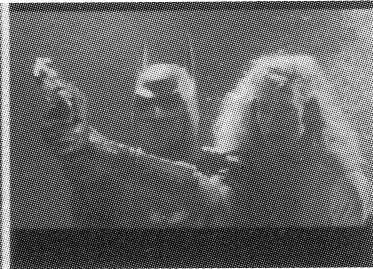
〈チャンピオン鷹より〉



〈バック・トゥ・ザ・フューチャー 3より〉



〈ダイ・ハード 2より〉



〈バット・マンより〉



〈フットルースより〉



〈サマーストーリーより〉



〈十戒より〉

| 資 料 名   | 音 声             | 所用時間  | 資料番号      |
|---|-----------------|-------|-----------|
| Footloose (フットルース)                                    | (英 語)           | 1'47" | E-0511    |
| A summer story (サマーストーリー)                             | 〃               | 1'36" | E-0512    |
| The ten commandments (十戒)                             | 〃               | 3'48" | E-0513    |
| Total recall (トータル・リコール)                              | 〃               | 1'58" | E-0514    |
| Magritte (マグリットー静寂・白昼夢ー)<br>(アート・フィルムギャラリー3)          | (多重(日本語・仏語))    | 0'54" | F-0155    |
| Picasso (ピカソー20世紀の巨匠ー)<br>(アート・フィルム・ギャラリー4)           | 〃               | 1'25" | F-0156    |
| Kandinsky (カンディンスキーー形態から精神へー)<br>(アート・フィルム・ギャラリー5)    | (多重(日本語・仏語))    | 1'00" | F-0157    |
| Delvaux (デルヴォーーサン・ティディバールの夢遊病者ー)<br>(アート・フィルム・ギャラリー7) | 〃               | 1'00" | F-0158    |
| Bonnard (ボナールー視覚的冒険ー)<br>(アート・フィルム・ギャラリー8)            | 〃               | 0'53" | F-0159    |
| Manet (マネー沈黙の視線ー)<br>(アート・フィルム・ギャラリー9)                | 〃               | 1'00" | F-0160    |
| Nuovo cinema paradiso (ニュー・シネマ・パラダイス)                 | (イ タ リ ア 語)     | 2'04" | It-0083   |
| Aida (歌劇:アイダ)   | 〃               | 2'37" | It-0084   |
| 夢   | (日 本 語)         | 2'00" | J-0155    |
| 利休  | 〃               | 2'15" | J-0170    |
| El cid (エル・シド)  | (ス ペ イ ン 語)     | 3'06" | S-0036    |
| Mitt liv som hund (マイライフ・アズ・ア・ドック)                    | (ス ウ ェ ー デ ン 語) | 1'42" | Swed-0020 |

## 編 集 後 記

### ◆ Audio Visual Journal 第21号をお届けします。

視聴覚教育委員会の諸先生方をはじめ、関係各位のご協力により、4-I、II LL教室のリプレイス仕様も決まり新年度より使用が可能になります。

シンプルで使い易いをモットーに仕様が作成

されたので機器の操作は簡単に出来、昨今利用要求の高い映像教材、マルチメディアに対応しうる教室になる予定です。

新LL教室の仕様の詳細は、第23号で紹介する予定です。

(I,A)

## AV Journal —第21号—

1991年12月15日発行

編 集 大阪外国語大学視聴覚教育委員会  
附属図書館視聴覚資料係

発 行 大 阪 外 国 語 大 学

印 刷 (株) ム ラ タ ・ 印 刷